

第 I 章 ハクビシンの基礎知識

1. ハクビシンの分布

ハクビシン (*Paguma larvata*) は1属1種で、ネコ目ジャコウネコ科に分類されている。南方系の動物であり、東南アジア、中国南東部、台湾、インド、スマトラ、ボルネオ、ジャワ等、東南アジアにかけて広く分布している。日本では昭和20年代初頭に四国、静岡県、山梨県、福島県にまばらに分布していたものが、徐々に分布域を拡大し、現在では南東北から中部、四国で分布が集中している。

分布情報と捕獲情報より、現在のハクビシンの分布状況を見ると、大阪府、鳥取県、大分県、沖縄県を除く43都道府県に分布し、ほぼ全国的に生息していることが分かる(図1.1)。

右図は「自然環境保全基礎調査－生物多様性調査－動物分布調査(哺乳類)報告書(環境省自然環境局生物多様性センター、2002)」より作成した。

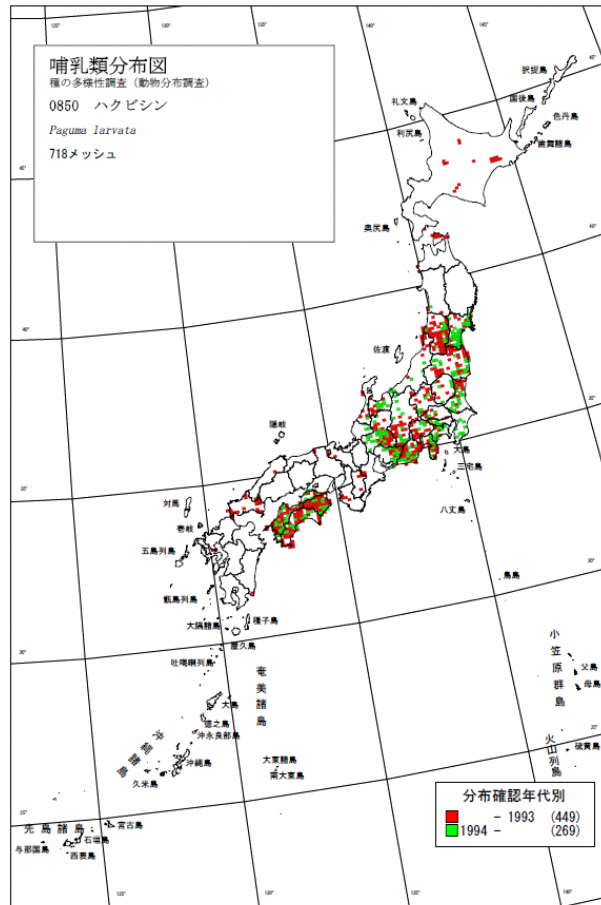


図1.1 ハクビシンの分布

ハクビシンは外来種?

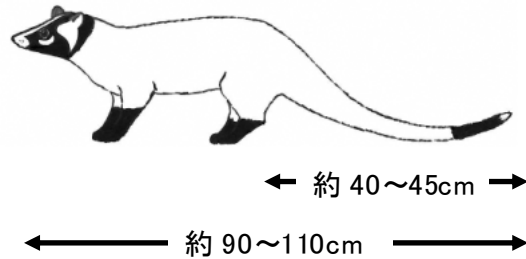
本種が外来種か在来種であるかについては諸説があり、未だ断定されていない。外来種であるという説は、①分布域が連続しておらず、大陸からの移動経路となる九州や北海道に連続的に生息していないこと、②わが国ではジャコウネコ科の化石が見つからないこと、③戦前から戦後にかけての毛皮需要の際に輸入・飼育されていた時期があることが理由となっている。

一方、在来種であるという説は、①江戸時代の書物に雷獣としてハクビシンが描かれていること、②日本の個体の頭骨計測値や形態学的特徴が海外のものと異なることが理由となっている。

2. 形態・生態

(1) 体の大きさ

- 成獣（大人個体）
○全長は約 90～110 cm
○体重は約 3～4 kg



(2) 体の特徴

- 体の大部分が灰褐色で、短い四肢は黒色。
- 額から鼻先まで白い模様がある。台湾名はその名の通り「白鼻芯」。
- 眼の下や耳の前に白い斑紋がある。
- 尾の先が白っぽい個体や、鼻が黒っぽい個体もみられる。
- 肛門の近くに独特の臭いを発する臭腺が発達している。

顔の模様



足跡
(後) (前)



垂直な雨どいを登った足跡

ハクビシンの足跡は、前足、後足とも指があり、丸みをおびているのが特徴である

(3) 行動

- 完全な夜行性であり、木登りが得意である。
- 平地から山地に生息するが、特に里山的な環境を好み、昼間は樹洞や洞窟、人家の屋根裏、倉庫等をねぐらとしている。
- ねぐらは複数あり、そこを転々と移動する。市街地周辺に生息する個体は側溝も移動ルートとして利用する。
- 行動する範囲は30～70ha程で、オスの方がメスよりも広い範囲で行動する。



ミカンの木に登り、ミカンを
食べているハクビシン

(4) 繁殖

- 1年に1回子供を産む。
- 1度に産む子供の数は平均2～3頭。
- 妊娠期間は約2ヶ月間。
- 1年中子供を産む。夏から秋にかけて多く産む傾向がある。
- 子供を産む年齢は生後10ヶ月以降である。
- 飼育個体の最高年齢は24才で、野生個体の寿命はこれよりも短い。



家屋の隙間で子育てを
しているハクビシン

(5) 食べ物

- 雑食性で、果実やトウモロコシなどの野菜、小動物、昆虫、鳥類やその卵を食べる。
- 好物は果実である。

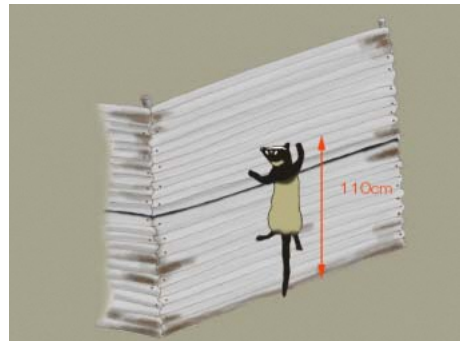
3. 運動能力

ハクビシンは樹上生活者とも呼ばれ、バランス感覚は非常に優れており木登りが得意である。足でものをつかむことができるため、電線の上を尾でバランスをとりながら渡り、移動することができる。また、飼育個体を観察してみると、高さにして約110cmまでジャンプすることができる。しかし、木から木への横へのジャンプは、あまり得意ではない。例えば1本のミカンの木に登りミカンを食べ、別の木に移動するときは一度地面に降り他の木に登ってミカンを食べる。

ハクビシンはネコの仲間なので、頭が入れば狭い隙間を自由自在に通り抜けることができるが、自ら穴を掘ることはしない。



電線を上手に渡るハクビシン



垂直ジャンプは得意



穴掘りは苦手

4. ハクビシンによる被害状況

ハクビシンの被害は、主に農作物に対する被害と生活環境被害である。農作物では特に果実に対する被害が多く、モモ、ぶどう、サクランボ、ナシ、ミカン、カキ、リンゴなどである。この他ではトウモロコシ、メロン、スイカ、イチゴ、トマト、ジャガイモ、サツマイモなどに被害が発生している。

生活環境被害では民家の天井裏や床下、物置といった場所に侵入し棲みつき、そこに糞尿を排泄する等の被害である。尿は天井にシミ汚れを作り、異臭を発し、場合によっては住民の健康にも悪影響を与える。



ぶどう被害



天井裏のフン被害

平成 18 年度の統計によるとハクビシンによる農作物被害については、イネ、マメ類、雑穀、果樹、飼料作物、野菜、いも類などの被害が報告されている。平成 18 年度の被害金額は 2 億 3 千万円で、平成 13 年度に比べ 2.5 倍に増加している。特に、果樹が被

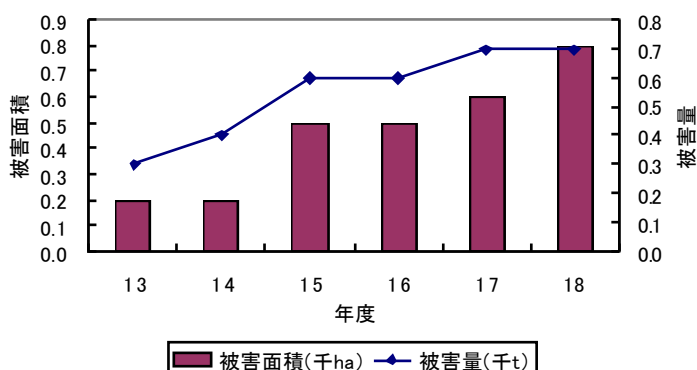


図 1.2 ハクビシンによる被害推移

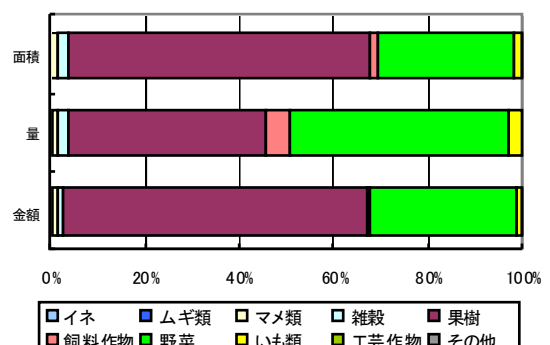


図 1.3 ハクビシンによる作物別被害内訳

農林水産省「生産局農産振興課資料」（平成 18 年度）より

害面積で 493ha、被害金額が 1 億 4 千万円と全体の 6 割以上を占めている（図1. 2～4）。

アライグマ、ハクビシン、タヌキの農作物被害については、現地での加害種判定がほとんどできておらず、被害はどれか特定の種にまとめて報告されている傾向がある。3 種とも生息が確認されている地域では、目新しさからアライグマが疑われ、報告されることが多い。しかし、実際はその生息個体数から考えてタヌキによる被害が多く含まれていると予想されることから、食べ跡や足跡などから被害を及ぼす動物を特定することが必要である。

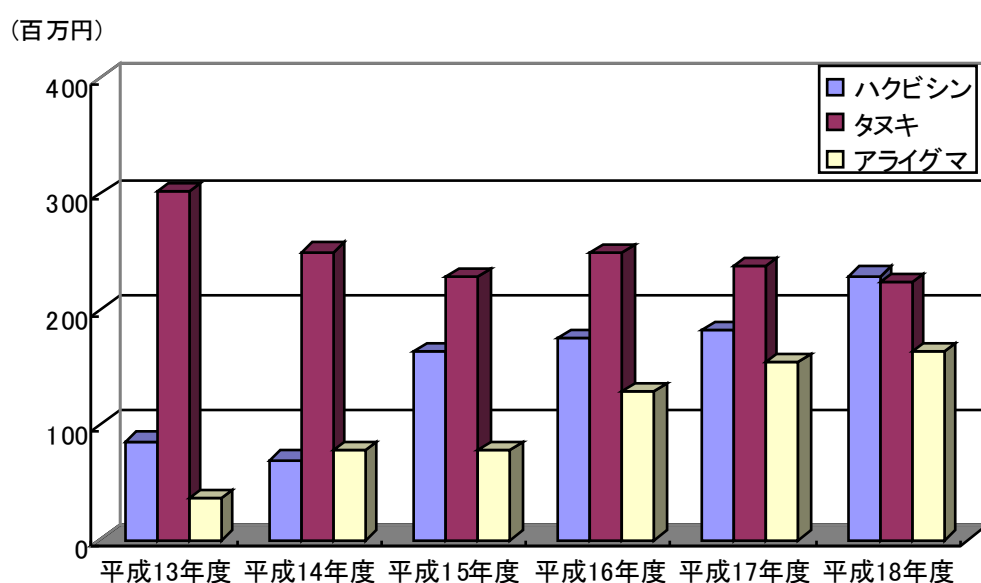


図 1. 4 ハクビシン、タヌキ及びアライグマによる年度別農作物の被害金額

農林水産省「生産局農産振興課資料」（平成 18 年度）より



5. ハクビシンの捕獲状況

ハクビシンは、農林水産業又は生態系に係る被害防止の観点から、平成6年にアライグマ、ミンク、ヒヨドリ、ムクドリと共に狩猟鳥獣に指定された。ハクビシンが狩猟鳥獣に指定される1994年以前は、毎年、有害鳥獣捕獲により200頭前後捕獲されている。狩猟獣に指定後は、1,000頭前後で推移していたが、近年捕獲数は急増し、平成16年度（2004年度）では、全国で1,890頭（狩猟719頭、有害鳥獣捕獲1,171頭）が捕獲されている。

狩猟による捕獲数は、平成6年度以降、約700頭で推移しているが、農作物への被害防止対策としての有害鳥獣捕獲数は、平成13年度までは150～300頭前後で推移していたが、平成14年度では約500頭、平成15年度、平成16年度では約1,000頭と急増している。

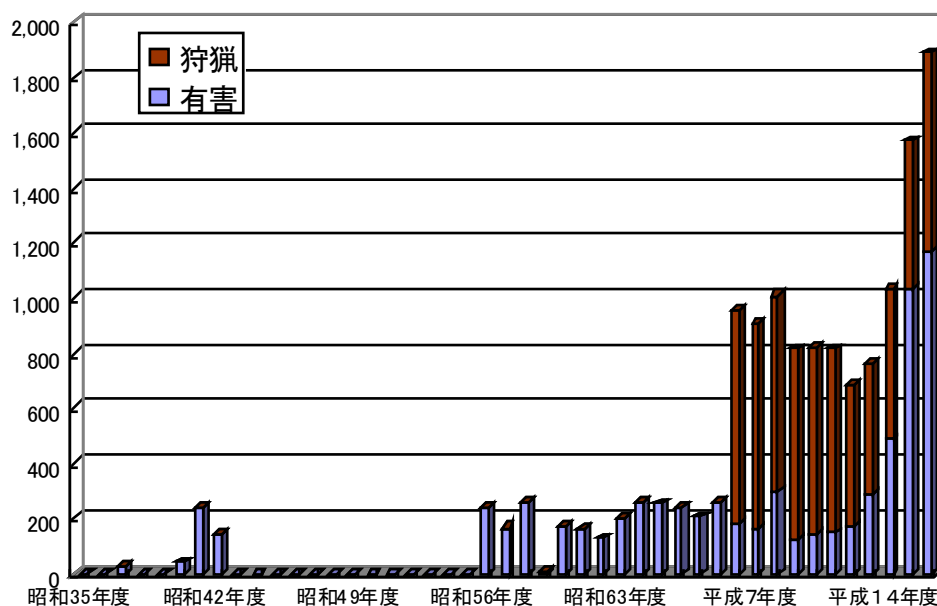


図1.5 全国の捕獲数の推移

環境省鳥獣関係統計書より

地域別に捕獲状況の特徴を見ると、狩猟による捕獲では四国地方（徳島県、香川県、愛媛県、高知県）が多く、次に、中部地方、東北地方、関東地方となっている。一方、有害鳥獣捕獲では、関東地方が11年間平均で約260頭となっている。

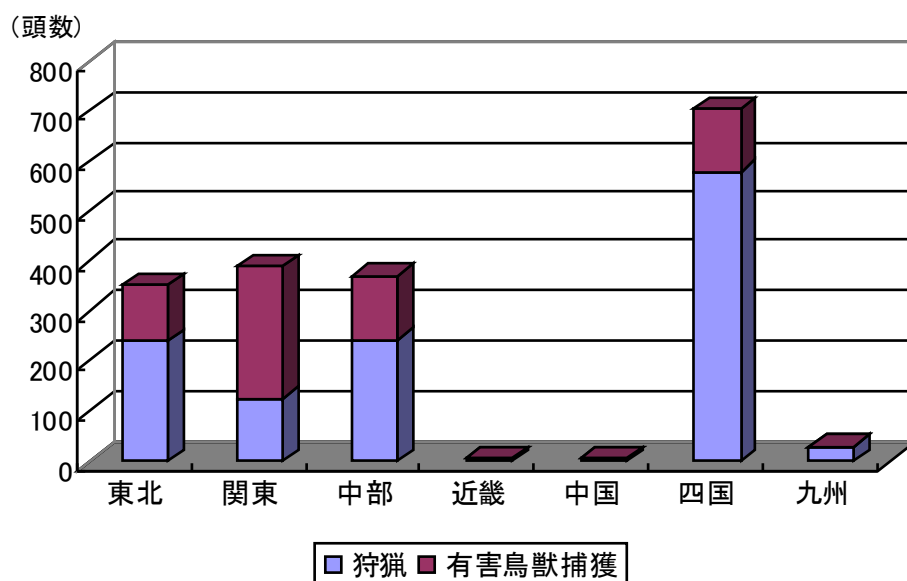


図 1.6 地域別平均捕獲数の推移

環境省鳥獣関係統計書より

狩猟について

狩猟を行うためには、猟法に応じた狩猟免許を取得することが必要である。狩猟免許の種類には網猟免許、わな猟免許、第一種銃猟免許、第二種銃猟免許がある。

狩猟免許試験は、居住している地域を管轄する都道府県知事が実施し、試験に合格して取得した免許は、全国で有効である。ただし、狩猟をしようとする場合は、その地域を管轄する都道府県に狩猟者登録をする必要がある。免許の有効期間は3年間で、3年ごとに更新が必要である。

現在の狩猟鳥獣は49種（鳥類29種、獣類20種）である。